

感染再拡大傾向明確に

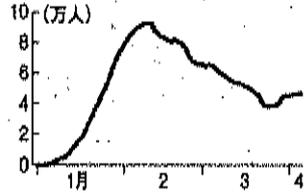
専門家会合分析 2週連続で増加

新型コロナウイルスの新型感染症患者数は、5日までの1週間でみると84都道府県で前週より増え、全国の総計も2週連続で増加した。6日、コロナ対策を厚生労働省に助言する専門家組織(アドバイザリーボード)の会合で分析が示され、全国で感染が再拡大している傾向がより明確になった。

▼3面II B A・2警戒、28面II 接續で「ワウワウ劇」

「第6波」の新規感染者数は年明けから全国で急増し、2月上旬から緩やかに減っていたが、3月下旬に底を打って以降は再び増加傾向にある。慶長の臨田隆字・国立感染症研究所長は記者会見で、「リバウンド(感染の再拡大)が懸念され、今後の動向に注意が必要」と述べた。

国内の新規感染者数の推移
直近7日間平均、朝日新聞集計



公費資料によると、6日までの1週間で全国の新型感染症患者は前週の1・08倍となり、2週連続で増えた。地域によって傾向に違いがあり、宮崎県で1・68倍、大分県で1・39倍、熊本県

で1・32倍と九州地方の増え方が目立つ。3大都市圏を見ると、東京都1・04倍、大阪府0・97倍、愛知県0・97倍だった。

年代別では、流行が広がる段階でこれまでもみられたように、20代の感染者が著しく増えていることが特徴で、全体に占める割合は8月の14%から4月は18%に上がった。10代以下は38%とあわせ、20代以下が新規感染者の半分を占める。

病院や自宅での療養者数も増加に転じた。ただ、重症者数と死亡者数は減り続けており、内閣官房によると、病床使用率は5日時点で東京都25%、大阪府26%など、40%を超えている地域はない。

専門家組織は再拡大の要因として、まん延防止等重点措置の解除と連休みや入学、花見シーズンが重なり交流機会が増えたこと、オミクロン株の「B A・1」から、より感染力が強い別系統「B A・2」に置き換わりが進んだことを挙げている。一方、今後は若年層でワウワウの3回目接種が進

み、気温が上がって換気をしやすいになれば、感染を抑える要因になりうる」として

「(接續)

BA.2 強い感染力を警戒

専門家組織「5月1週目 9割置き換わり」推計

感染力が強いとされるオミクロン株の別系統「BA.2」が国内でも支配的になりつつあり、厚生労働省に新型コロナウイルス対策を助言する専門家組織は強い警戒感を示した。治療薬の効果をも弱めるといふ報告もあり、戦略の練り直しを迫られる可能性が出てきた。

▼一面参照

新たな変異に懸念も

国内外の研究によると、オミクロン株の別系統「BA.2」は、これまで国内で広がっていたオミクロン株よりも感染力が1.2〜1.4倍程度強いとされる。国立感染症研究所の推計では4月1週目に全国の感染者の6割を占め、さらに5月1週目には9割置き換わりと推計される。

感染者が別の人に感染させるまでの期間「世代時間」が短いことも脅威だ。京都大の西浦博教授は当初のオミクロン株よりも15%短いと推計。感染が広がれば、これまで以上のスピードで波が大きくなるおそれがある。6日の専門家組織の会合で、現在の感染増にBA.2が「強く影響」と指摘。歓迎会や新学期の学校での注意を呼びかけた。

海外でも急拡大し、世界保健機関(WHO)はBA.2が68カ国で優勢になった。

新型コロナウイルスのオミクロン株の電子顕微鏡写真(国立感染症研究所提供)

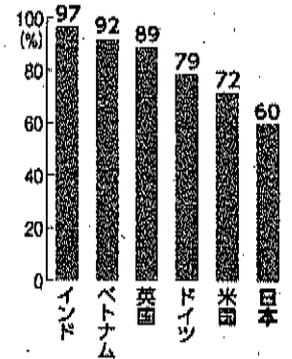
とする。米疾病対策センター(CDC)は、米国では直近1週間で72%と推計。米スクリプス研究所の研究者がとる「サーベイブレイク」では、直近1カ月の感染者に占めるBA.2系統の割合は、ベトナムで92%、英国で89%、ドイツで79%と高い。中でもドイツでは2月下旬に一度感染の波が収束に向かったが、再び拡大。4月以降は1週間平均で1日あたり20万人前後となっていた。

さらに新たな変異も懸念される。英国などでは、オミクロン株とデルタ株が同じ時期に流行し、その後オミクロン株の中からも従来系統のBA.1と新たな系統のBA.2が同時に流行した。そのため、1人の感染者の体内で異なる変異株や系統のウイルスの遺伝子が混ざり「組み換え」が起きたと指摘されている。

BA.1とBA.2の組み換えで生じたとされるのが「XBB」系統と呼ばれる変異株だ。1月に英国で初めて報告され、3月20日までに600検体以上が確認されている。暫定的な分析では、BA.2よりも感染が早く広がる可能性もある。ほかの組み換え変異株とあわせて、WHOは「注

各国のコロナ感染者におけるBA.2系統の割合

日本は感染症研の推計値。米国は米疾病対策センターの推計値(直近1週間)。その他はOutbreak.infoがまとめた検査結果(直近1カ月)から



治療薬の効果 落ちるおそれ

BA.2の感染が広がった場合、これまでの対応で乗り切れるのか。WHOは英国などの研究から、BA.2の重症度はこれまでと変わらないとの見解を示している。ただし、一部の治療薬の効果も落ちるおそれも指摘されている。

国内で重症患者に使われる抗ウイルス薬「モヌピラビル」は有効ではないだろう(FDAのファクトシート)と指摘。3月末、BA.2の感染が広がる一部の州で、使用許可を取り消すと発表した。

厚生労働省は日本でも今後モヌピラビルを推奨しない可能性について、「サーベイブレイク」で十分あり得る」と懸念を示している。

BA.2の感染が広がった場合、これまでの対応で乗り切れるのか。WHOは英国などの研究から、BA.2の重症度はこれまでと変わらないとの見解を示している。ただし、一部の治療薬の効果も落ちるおそれも指摘されている。

国内で重症患者に使われる抗ウイルス薬「モヌピラビル」は有効ではないだろう(FDAのファクトシート)と指摘。3月末、BA.2の感染が広がる一部の州で、使用許可を取り消すと発表した。

厚生労働省は日本でも今後モヌピラビルを推奨しない可能性について、「サーベイブレイク」で十分あり得る」と懸念を示している。

を越えた。感染者数は3月末以降、1週間平均で4万5千人前後が続いているが、ワクチンの効果で感染が大きく広がらずに済む期待もある。

厚生労働省に新型コロナウイルス対策を助言する専門家組織の座長を務める、脇田隆宇・国立感染症研究所長は3月30日の会合で、これまでには規模で感染が広がった「第6波」とワクチンによって、多くの人が免疫ができた可能性を指摘した。BA.2については「今後どういった感染状況になっていくか、みる必要がある」と話す。

厚生労働省はすでに昨年12月、別の中和抗体薬「ロナプリーブ」がオミクロン株に効果が低いとして、使用を非推奨にしている。代わりにモヌピラビルの需要が増し、3月末までに11万人に投与された主力の薬となっていた。

ほかの薬があるものの、妊婦に使えなかったり、服用薬との飲み合わせに注意が必要だったりして、それぞれ使える患者が限られている。置き換わりの状況や明らかになる変異株の特性に合わせ、治療体制を点検することも迫られるとされた。

(市野城 野口憲太)